

新生「賀川豊彦学会」のことなど

加山 久夫

賀川豊彦学会第16回大会が去る7月5日(土)、本学にて開催されました。同学会は専務理事として学会運営の要であった本学の田村剛先生が病没されたこともあり、運営上さまざまな困難を強いられていましたが、新たに、会長として古屋安雄氏(聖学院大学大学院教授・国際基督教大学名誉教授)、専務理事として石部公男氏(聖学院大学教授)のリーダーシップのもとに再出発する運びとなりました。これとは別に、田村先生はまた、本キリスト教研究所の賀川豊彦研究プロジェクトの責任をもっておられましたので、これまた停滞し、開店休業を余儀なくされました。明治学院と賀川豊彦の深い関わりを考えるにつけ、このような状態を残念に思っていました。私自身はすでに、1988年の賀川生誕百年の頃から、故小野忠信先生より賀川豊彦記念講座委員会の事務局を引継ぎ、お世話してきましたので、これ以上の負担を担うことは困難な状態でした。そこで考えたのが、これら三つの活動をいわば「三位一体」的に担ってゆくことが出来ないかということでした。幸い、私の提案は関係の方々のご賛同をいただき、約1年の準備期間を経て、今年度から新たな共同の歩みを始められることとなり、大変喜ばしく思っています。



7月5日 賀川純基氏の講演

今春より、賀川豊彦研究プロジェクトに播本秀史所員、永野茂洋所員が新たに参加して下さることになり、2003年度最初の公開研究会では、福元真由美協力研究員(東京学芸大学専任講師)が「賀川豊彦と〈児童の世紀〉の時代」をテーマに大変充実した研究発表をしてくださいました。後期には、12月6日(土)14時—16時、雨宮栄一氏による公開研究会(「賀川豊彦と大杉栄——初期日本労働運動をめぐって——」)が予定されています。これらの研究会が賀川豊彦学会との共同研究会として執り行われることが同学会および本研究所所員会議で了承されており、今後とも、賀川豊彦研究プロジェクトの研究会はこのような両者の協力方式で進められる予定です。

他方、賀川豊彦記念講座委員会は今秋10月25日(土)14時—16時、富士見町教会において、第25回賀川豊彦記念講演会(河上民雄氏「20世紀とは何であったか——一つの試論——」)の開催を予定していますが、今回から賀川豊彦学会との共同開催ということになりました。因みに、今回の講演会には、賀川豊彦記念・松沢資料館、本所賀川記念館、イエス友の会、(財)生協総合研究所、東京YMCA、東京YWCAなど、賀川にゆかりのある多くの団体が後援団体として参加しています。

上記第16回賀川豊彦学会の午前には、西村虔氏「賀川豊彦の贖罪観」、鳥飼慶陽氏「賀川豊彦没後の四十余年」、小澤温氏「社会福祉基礎構造改革と賀川豊彦の先駆性」、篠崎恭久氏「高校日本史から見た賀川豊彦」、鈴木武仁氏「賀川豊彦における伝道の神学」など、賀川研究の多面性を表すさまざまな研究発表が行われ、午後には、賀川純基氏による講演「賀川豊彦の視野」がありました。この講演は賀川豊彦について、研究すべきさまざまなテーマを示唆するとともに、賀川豊彦が、考え、志向したさまざまな分野において、われわれがこれから取り組むべき多くの課題を提言する、きわめて示唆深いものでした。氏によれば、前者は基本的には賀川豊彦学会の課題で

あり、後者は、賀川豊彦記念講座委員会がこれまで、賀川が思想し、実践したさまざまな分野で優れた働きをしてきた方々を講師としてお招きし、発言していただいていたように、主として、賀川豊彦記念講座委員会によって担われてきました。賀川豊彦の人と思想を考え、それを現代に意義あらしめるためには、これら二つのことを自覚的に受けとめ、取り組んでゆく必要があることを、改めて考えさせられた幸いです。

(かやま ひさお 所員・文学部教授)